堕落と更生の可能性について

――創作物の悪役を手がかりに――

海老名宜陽

はじめに

善く生きたいという願いは誰もが持っているものだろう。だが，それを実現できる人間はどれほどいるだろうか。善を希求しながらも，それに到達することができず，却って悪に甘んじてしまうような現象を本稿では堕落として捉え，堕落した人々が再び善を目指せるようになるまでの，更生の道筋を明らかにしたい。

そのためにまず，悪の概念について整理をする。そして悪を体現する人物像として，創作物に描かれる悪役を取り上げる。悪役の分析を通じて，堕落が生じる経緯を確認する。その後，堕落を経てなお善に回帰するという，とある悪役を取り上げ，その背景に描かれた物語を分析し，更生に至る道筋を明らかにしたい。

１．悪について

はじめに，悪について整理をしたい。そのために，カントの『実践理性批判』から，道徳的法則について引用する。

> 「純粋理性は，それ自体だけで実践的であり，我々が道徳的法則と名づけるような普遍的法則を（人間に）与える」[1]。

> 「道徳的法則は，いわば純粋理性の事実として我々に与えられている，そして我々は，この事実をア・プリオリに意識しているのである。またこの事実は，たとえ道徳的法則が厳格に遵奉された実例を，我々が

1　カント著，波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳（1979 年）『実践理性批判』岩波書店，75 頁。

経験においてただ一つも見出し得ないにせよ，しかし確然的に確実なのである」[2]。

カントは，人間の理性（実践理性）は私たちに道徳的法則を与えると説明した。そしてその道徳的法則はア・プリオリに（経験に関係なく）に意識される。

ではこの道徳的法則とはなにか。引き続きカントから引用したい。

「善の概念および悪の概念は，道徳的法則に先立つのではなくて（善および悪の概念のほうが道徳的法則の根底に置かれねばならないと思われるかも知れないが），（いまここで述べるように）道徳的法則のあとにあり，この法則によって規定せられねばならない」[3]。

つまり道徳的法則とは，善の概念および悪の概念を規定するものである。ゆえに，それを与えられている人間は善悪を区別できるのである。

人間は，実践理性から与えられた道徳的法則を基にして，善悪を判断し，自らの意思によって善行も悪行も選択できるよう生まれた。したがって，カントの議論における善悪とは，選択する当人の意思の問題として理解される。人が善人となるか悪人となるかは，当人が自由意思に基づいて善行を選択するか悪行を選択するかという，意思の問題に委ねられている。

以上のカントの善悪の議論を踏まえると善とは，実践理性に従い道徳的法則を遵守しそれを実践することである。そしてその反対に悪とは，実践理性に反して選択意思を働かせ，道徳的法則に反する動機のために行為することとなる。

本稿ではこのような，本来志向すべき善に背いて，罪悪感を覚えながらそれでもなお悪を選んでしまうという悪の在り方に注目したい。

---

[2]　同上，105 頁。
[3]　同上，136 頁。

２．悪役について

悪を体現する人間像として描かれるのが創作物の悪役である。創作物に登場する悪役は，現実に存在する悪を体現しており，私たちが日常経験する悪を強調して分かりやすく描き出したものである。

堕落のモデルとして実在の人物を扱う場合は，堕落にいたる理由に様々な要因が交錯する。そのため，堕落の決定的な要因が不明瞭になることや，そもそも記録に残らない場合も考えられる。だが物語に描かれるキャラクターの場合はそれが物語の中の重要な要素として描かれるため，比較的分析がしやすい。創作物の悪役であれば，堕落までの経緯や非道徳的な選択を行うようになった理由までが作中に描かれるため，より具体的に悪へいたるプロセスを分析することができる[4]。

そこで本稿では，創作物に描かれる悪役を分析することで，現実の悪を知る手がかりとしたい。

３．悪役の特徴

（１）破壊と破壊のカタルシス

ここからは悪役の特徴を分析する。はじめに，悪役と破壊の関係について見ていく。

悪役という言葉を耳にすると，真っ先に思い浮かぶのが破壊の情景である。整然と並ぶビル群や，人や物を運搬するロジスティクスを破壊する悪役の姿は，映画や小説などでたびたび描かれる。悪役は秩序だった世界を破壊する。破壊は悪役の特徴の一つである。

破壊には，一種の快感をもたらす作用が含まれている。そのことを本稿では，破壊のカタルシス（浄化作用）として考える。破壊のカタルシスは，私たちが純然たる破壊自体に快感を覚える性向に由来する。日々のストレスが祟り鬱屈としたとき，目の前にあるものを放り投げて壊したくなると

4　映画『ダークナイト』のジョーカーのように，作中に悪役の過去が描かれない作品も多く存在する。そのような作品は，悪役の過去が作品の物語に直接関係しないか，あるいは悪役のミステリアスさを演出するために，意図的にそれらを省いているものと考えられる。本稿ではそのような悪役は取り扱わない。

きがないだろうか。そのような原始的な破壊の衝動が呼び起こす喜びこそが，破壊のカタルシスである。

そしてそのようなカタルシスを私たちに与えてくれるのが悪役だ。悪役はスクリーンの中で大都市や建物を木端微塵に破壊し，それを見る私たちにカタルシスをもたらす。私たちは通常，破壊衝動が湧き起こったとしても，それを抑えるため欲望は満たされない。だが，悪役は破壊衝動を躊躇なく解き放つ。私たちが我慢する破壊を，代わりに悪役が実行することで，それを見る私たちは日頃解消されずにいる欲求を満たしカタルシスを得られるようになる。

このように，悪役は私たちが従う道徳観に，いとも簡単に背いて破壊衝動を解放してみせる。このことは，悪役が常識には捕らわれない破天荒な大物であるかのように，私たちに錯覚させる。

そして破壊は単なる快楽享受に留まらず，社会に対するメッセージを示すことがある。正義が象徴する秩序は安心と安全，安定をもたらすが，その反面，古いルールや因習に縛られると腐敗の温床となる。正義や秩序として君臨するはずのものが，因習や事なかれ主義に侵されたとき，そんな倦んだ社会を破壊する悪役は一種の爽快感をもたらす。社会に疲れた人々にとって，退屈で不条理な秩序を破壊する悪役は，独特な魅力を放つことだろう。

（２）悪役のペイソス

悪役の次なる特徴は，哀しみを背負っているということだ。その哀しみの原因の一つに，敗北を宿命づけられているということが挙げられる。悪役は善と対立する以上，最後には必ず敗北する運命にある。一時的には勝利を収めることがあっても，必ず最後には善に敗北する。ここに悪役が背負い続ける哀れさ，ペイソスがある。生まれながらにして敗北から逃れることのできない悪役が，善に抗うためにどれほど努力をしても報われることはない。その意味において，悪役の纏う威厳や崇高さのようなオーラはすべて虚勢にすぎない。

悪役がペイソスを帯びる理由の二つ目に，善を選びきれなかったという

点が指摘される。悪役もまた実践理性に与えられた道徳的法則を持つため，悪事を働くたびにその自覚があるはずである。そのため，悪役は過去のどこかのタイミングで善を志向することを諦めた人物ということになる。善を諦めて，罪悪感にさいなまれながらも悪に堕ちるようになったという悲劇的な過去が，悪役にペイソスを付与している。

（３）悪役の最期

悪役が敗北するとき，悪役のまま退治される場合と，善人として更生したうえで裁きを受ける場合の二種類の結末が存在する。更生することなく退治される悪役は文字通り，反省の機会を与えられない，またはそれを棒に振って最期を迎えることになる。このような最期を迎える悪役は善に回帰することはなく，悪人として生涯を終えることとなる。

もう一つのパターンでは，悪役が更生を経て最期を迎えることとなる。前者とは異なり，一度悪に堕ちた悪役が，物語の終盤に更生し，善人としての姿を取り戻すというストーリーが見られる。このような悪役の更生には，その悪役が積み重ねてきた悪事に向き合うという悔悟の側面が含まれる。罪を直視し，それでも善に回帰しようとする意志の強さがそこには現れており，そのような悪役には最早ペイソスではなく勇気が見られるようになる。このような結末を経た悪役は，善人として生涯を終えることとなる。

４．具体的な悪役の分析　ダース・ベイダーについて

ここまで悪役に一般的にみられる要素について述べてきた。ここからは，その中でも堕落のペイソスと更生という特徴を有する悪役を取り上げて，より具体的に分析していきたい。そこで本稿では，スターウォーズシリーズに登場するダース・ベイダーを取り上げる。なお本稿ではスターウォーズシリーズの中でも，第一作から第六作までのナンバリング作品のみを扱う。

スターウォーズは，広大な宇宙を支配する悪の帝国と，その圧政に立ち向かう反乱軍との戦いを描いた SF 作品である。ベイダーはそのシリーズ

に登場する帝国軍の騎士で，フォースと呼ばれる超能力とライトセーバーという刀型の武器を手に戦う。その剣技の実力は作中でもトップクラスであり，その肢体は漆黒のアーマーに覆われている。フルフェイスのマスクはベイダーの素顔を完全に覆い，機械の兵士のような趣を与えている。

スターウォーズのエピソード 1 から 3 までの三部作ではダース・ベイダーの幼少期から青年期までが描かれる。

ベイダーは元々アナキン・スカイウォーカーという名で，正義の騎士ジェダイに才能を見初められ，自らもジェダイとなるべく厳しい修行に励む青年だった。ジェダイとは，フォースと呼ばれる超能力とライトセーバーの技術を身に着けた，正義の集団である。アナキンは師匠のオビワンを兄の様に慕い，銀河に平和をもたらすジェダイとして日々精進していた。だがジェダイの厳しい戒律や組織の腐敗，そして恋人の死の危機に直面し，精神が激しく動揺する。そしてその好機を見逃さなかった悪の帝王ダース・シディアスの手によって，アナキンは堕落し悪の騎士ダース・ベイダーへと成り果ててしまう。

堕落後のベイダーの人生は悲惨なものとなった。師であるオビワンとの決闘に敗れ全身を機械の身体に置き換えることとなり，最愛の恋人も失ってしまう。ベイダーはそんな哀しみを祓うかのようにして，星々を破壊と恐怖で支配するようになる。ベイダーの見せる徹底的な弾圧には，破壊のカタルシスが見られるが，その奥には拭いきれないペイソスが垣間見える。

続くエピソード 4 から 6 では主人公がベイダーからその子，ルーク・スカイウォーカーへと交代する。出自を知らずに育ったルークはオビワンの下でジェダイとなるべく修行をはじめる。未熟なルークは，オビワンと道中出会った仲間達と共に帝国軍に囚われた姫を救うべく，敵陣に乗り込むが，そこでベイダーと接敵する。ベイダーはかつての師であるオビワンと決闘し，ルークの目の前でこれを倒す。師を殺害されたルークはベイダーに憎しみを抱きながらも，その場は撤退する。その後もルークとベイダーは各地で出会い，戦闘を重ね，遂にルークは自分がベイダーの子であることを知る。激しく動揺したルークだったが，そこで絶望はせず，むしろかつて正義の騎士であった父の更生を信じるようになる。

エピソード６の最終シーン，シディアスとベイダーが待ち受けるところへ，ベイダーの息子である若きジェダイ，ルークが姿を見せる。ジェダイとして成長したルークはその剣技で父ベイダーを打ち負かす。シディアスはルークに，そのままベイダーを殺すよう指示するが，ルークはそれを拒否する。ルークはジェダイとして高潔に生きることをシディアスに宣誓する。それを聞いたシディアスは誘惑に乗らないルークを見限り，自らの手でルークを殺めようとする。シディアスの手から放たれる電撃に苦しみ悶えるルークは，同じくジェダイの騎士であった父に助けを求める。ベイダーは瀕死の息子が苦しみ助けを求める様子を目の当たりにし，ついに，正義の心を取り戻す。ベイダーは息子を襲うシディアスを担ぎ上げると，奈落の底へと突き落とし，愛する息子を救ったのだった。

堕落してしまったベイダーを救ったのは息子の想いだった。例え悪の帝国の手先となっても，かつてジェダイを務めていた父の心はまだ生きているというルークの信念が，堕落していた高貴な精神を呼び覚ました。だがジェダイとしての姿を取り戻したアナキンに残された時間は僅かだった。最期の力を振り絞って息子を救ったアナキンは，息子の腕の中で静かに息を引き取った。

５．堕落の引き金

以上が簡単なダース・ベイダーのストーリーである。ここからは，今まで見てきたベイダーのストーリーから，更生に至る道筋の手がかりを得たい。そのためにまずは，なぜベイダーが堕落してしまったかについて分析していく。

エピソード１から３までの物語でアナキンが堕落に至った理由は主に三つ考えられる。それは，善の過酷さ，絶望，そして誘惑である。

はじめに，善の過酷さについて考えたい。スターウォーズの物語ではジェダイという生き方が善く生きることと重ね合わせて描かれている。

ジェダイとして生きること，つまり善く生きるということは困難だ。善く生きるためには，嘘をつかず正直に振る舞い，利己的な動機よりも道徳的な行為を優先して生きていかなければならない。時には周りの他者のた

めに自己を犠牲にせねばならないこともある。そしてそれは，周囲の他者が悪事を行っている場合でも求められる。周りが過ちを犯そうとも，自分だけは善い選択を貫かねばならない。しかも，善く生きていればそれで報われるという保証は一切ない。全ての選択の責任は自分に返ってくる。そんな自己犠牲の上に成立し，何からも守られない孤独で過酷な生き方こそがジェダイの生き方であり，善く生きるということである。

このような過酷さを前に逃げ出してしまうことこそが堕落である。つまり堕落とは，進んで悪に飛び込むということではなく，善として生きることの過酷さから逃れようとすることに始まるものだ。アナキンはジェダイの要求する過酷さに耐えきれなくなり，そこから逃げ出したのだった。

アナキンの堕落の原因の二つ目は絶望である。作中でアナキンは二度の絶望に見舞われている。一度目は母の死，そして二度目は愛する恋人の死だ。

アナキンは幼少期に才能を見初められジェダイにスカウトされたが，その際に唯一の家族である母と引き離されることになった。そんなアナキンの母はエピソード２で蛮族に誘拐され殺害される。それを知ったアナキンは怒りに我を忘れ，蛮族の一味を皆殺しにする。これはジェダイの掟に背く罪であった。ジェダイの掟では，虐殺は当然ながら，激情に身を支配されることすら禁じられている。アナキンのこの深い絶望と背理の経験は，彼の堕落への一歩を暗示していた。

母の死から数年後，アナキンは再び愛する人を失う危機に直面する。アナキンは最愛の恋人にも死の危険が迫っていることを，フォースの予知能力で感じ取ったのだった。既に母を失っているアナキンは，愛する者との更なる死別に狼狽し，ジェダイの長老にアドバイスを求める。だが長老は愛する者との分かれは必然だという達観した言葉をアナキンに贈り，アナキンは言葉を失う。この出来事はアナキンの中で燻るジェダイへの不信感を一層募らせることになった。

以降アナキンは，最愛の恋人を救う手立てを求めて必死になる。恋人を失うかもしれないという恐怖と絶望は，アナキンの選択意思を混乱させた。このように，人は深い絶望に見舞われると，正常な判断ができなくなり，

誤った選択をしてしまう危険性が高まる。

加えて，深い絶望は善の過酷さを一層強調するという側面を持つ。アナキンはジェダイとして誠実に努力を重ねてきたが，突然母を失う悲劇に見舞われた。このように人は，どれだけ善く生きていようと，突然の事故や治療の難しい大病などの悲劇に見舞われることがある。悲劇の中には，人生を根底から揺るがし，健やかなる日常から危険な混沌へと人々を突き落とすようなものもある。

過酷さに耐えながら善く生き続けてきた人ほど，人生の転換点で何らかの悲劇に見舞われ，正道への復帰が適わなくなってしまった時，深い絶望に襲われるのではないだろうか。あれほど誠実に生きてきたのになぜこんな目に遭わなくてはいけないのか，という悲しみが胸に去来するだろう。そのような絶望に直面した人は，それでもなお過酷な善を貫くのかという選択を突き付けられる。ある意味で絶望は，善に裏切られたかのような感覚を人に刻み付ける。ゆえに絶望は，善の過酷さを一層強調する。

アナキンは悲劇に襲われたことで絶望し，正常な判断が難しい状況に陥った。また絶望は，ジェダイとして善く生きることへの不信感を増幅させた。そして。これが堕落の原因の最後である，誘惑の付け入る隙を生み出した。

悪の皇帝ダース・シディアスは，葛藤するアナキンに目を付けた。シディアスはアナキンの未熟さに付け入り甘言を囁いた。アナキンが恋人を愛することを否定せず，心に湧き上がる感情も抑え込むのではなくむしろ激しく解き放てばよいのだと促す。これはいずれもジェダイの教義に背くものであるが，若きアナキンにとってはまさに求めていた生き方であった。シディアスはアナキンに，善であり続けることの難しさを自覚させ，そこから逃れることの快楽を説いた。シディアスが，迷いと不安と怒りの只中にあった若きアナキンを誘惑し誑かしたのだ。

このシディアスの誘惑が決定打となり，アナキンはジェダイであることを諦め，堕落してしまった。

アナキンの堕落は悪であるが，それは善の過酷さと，絶望，そして誘惑に襲われたために起こったことだった。アナキンにとって，ジェダイとし

て善く生きることはあまりにも過酷なことだった。そこへ母の死が襲い，ジェダイとしての矜持が激しく動揺した。一度は堕落を踏みとどまったアナキンであったが，再び最愛の人との別れの危機に瀕した際には，かけられた誘惑の言葉に逆らうことができなかった。シディアスの誘惑がアナキンにジェダイとして生きることの過酷さを自覚させた。それと同時にその辛さから逃れることで得られる快楽を教えたのだ。過酷な善から逃れたいという心の弱さ，絶望による判断力の喪失，そしてシディアスの誘惑，これらが原因となってアナキンは少しずつ悪へと導かれ，完全に堕落した。

６．寛容さについて

ダース・ベイダーが堕落した原因を踏まえて，次はそれらの対策を考えたい。はじめに，善の過酷さの問題について考える。

カントの議論で善悪は，選択の問題として説明される。善を選び続けることがどれほど困難でも，最終的に悪を選べばそれは本人の責任となる。善の過酷さは堕落を正当化する理由にはならない。堕落はあくまでも，それを選択した本人の責任として理解される。

だがこの説明をそのまま用いて，アナキンの堕落は自己責任であり酌量の余地はない，ゆえに堕落を防ぐ方法は堕落の道を選ばないことである，と結論することは控えたい。それは非常に論理的であるが，現実に存在する人間の弱さを無視してしまうことになる。

ここでは，善の捉え方を柔軟なものとすることで，その過酷さを少しでも緩和するような方法を考えたい。

スターウォーズの物語の中で，ジェダイは一度滅ぼされる。ジェダイ崩壊の要因にはアナキンの堕落も大きくかかわっているが，その遠因となったのが，ジェダイの過剰な教条主義であった。アナキンの時代のジェダイは掟を非常に重視しており，あらゆる判断が掟に背いているかどうかでのみ判断されていた。そのため柔軟な判断や情状酌量などの考えはなく，却ってそのような態度は執着心を生み，悪に堕ちる原因となるとして，忌避されていた。このような旧態依然とした柔軟性のない，凝り固まった思考に陥っていたのが当時のジェダイであり，これが原因となって若きアナキ

ンの離反という悲劇を生みだすこととなった。

確かに掟は遵守せねばならないものではあるが，一方でその扱い方を誤ると融通の利かない頑なさを生み出すという側面を持っている。では，そのような事態に陥らないために，重要なこととは何か。それは，掟の下で柔軟な対応をする余裕を持つことだ。このような余裕は寛容さを育む。

これは，一方的に掟の正当性を説いて他者を厳しく糾弾する態度の中では養われない。客観的な視点しか持ち合わせていないと，罪を犯したものの立場を見落としてしまう。そのような視点は柔軟性を損なった不寛容な態度を生み出す。

過剰な原理主義はあらゆる失敗を許さない。そんな過剰な潔癖は却ってあらゆる病の温床となる。従って，掟の下で何かの対応をする際は適切な寛容さをもつことが重要となる。

そして，他者に対して寛容に振る舞うことが出来るようになれば，自然と自身の振る舞いに対しても寛容になることができるだろう。自身への寛容さと他者への寛容さは密接に関連している。自身に対して厳格な掟を課し続ける者は，他者に対しても厳格な判断を下すリスクが高まる。私はこれほど自らを律しているというのに，なぜあなたはそれほど自堕落でいられるのか，というような態度がそこから生まれる。だが反対に自分に対して寛容であれば，そのような頑なさは適度に弛緩されるだろう。

このような寛容さがあれば，善の過酷さとそれに耐えかねるという心境が多少緩和されるのではないだろうか。過剰に厳しく，一点の穢れも許さないような態度でいれば，その苛烈さの反動として堕落の危機が迫るだろう。だが小さな過ちを犯す者を許すような，寛容さを身につけることができれば，善を積み重ねることの心理的な緊張感は適度に緩む。常に気を張っているといつか緊張の糸は切れてしまう。だが，厳しく糾弾すべき悪事と，それほどではない小事とを見極めるような，けじめを持った態度を養うことが出来れば，堕落は予防することができよう。

善が過酷であるからこそ，人はそこから逃げ出すようにして堕落するのであった。善の過酷さを捉え直し，適切な理解を持つことができれば過剰な苦しみから解放されるはずだ。

７．周囲の環境と選択

最後に，人が自らの意思に基づいて行為を選択する際に，周囲の環境が及ぼす影響について考えたい。そのためにベイダーの物語を再び振り返る。ベイダーが最後に善へと還ることができたのは，ルークの功績だと言える。そしてここから，善へと導いてくれる存在と親しくすることが，更生の一助を担うということが分かる。共に正道を歩み，どちらかが堕落しそうな時は支え合うことのできるような人間関係を築くことが，堕落の予防策，解決策として有効であろう。

だが，それゆえに更生において最も重要な要素が人間関係であると結論するのは，早計である。なぜならば，そもそもベイダーが堕落した原因を作ったのもまた，ダース・シディアスとの人間関係にあったからだ。

ベイダーにとってルークが正義の道へと背中を押す存在であったとするならば，対称的にシディアスは悪の道へと背中を押した存在である。つまり，一口に人間関係と言えど，更生の道を拓くものもあれば，堕落へ誘うものもあるということになる。

当然，どのような環境にあっても最終的に選択をするのは本人であり，その意味において選択こそが最も重要な要素ではあるが，それでも周囲の環境が選択に及ぼす影響は無視できない。

このことから理解されることは，決定的な場面で適切な選択ができるような環境に予め身を置いておくことが堕落を遠ざけるうえで重要であるということではないだろうか。自分の周囲の環境を整えるということも，自分の選択によって操作可能な要素である。当然，家族構成や故郷などの，変更することのできない要因はあるが，可能な範囲で適切な環境を整えていくことならばできよう。

では，堕落を遠ざけるような環境とはどのようなものか。それは善を実践する者の多くいる環境である。そのような環境を選び，そこに身を置くことが堕落を未然に防ぐ。交際する人を選択することや，所属する集団を吟味することが，堕落から離れた環境に身を置くこととなる。ベイダーの例では，シディアスのような人間は遠ざけるようにし，ルークのような人間と日頃から接するようにすることが，重要なのだと考えられる。

もしもそれが難しい場合，つまり既に自分の置かれている環境が悪に近しいものであった場合は，自分自身が積極的に善を実践していくことが重要であると考える。自身が善を積み上げることができれば，周囲の人々もまたその影響を受けることとなる。悪に通じるような者が周囲にいたとしても，その者を善に導くことができるように立ち振る舞うことが重要ではないか。自分自身が善を積み上げることで，周囲の人間も善を選択しやすい環境が生まれる。その積み重ねが周囲の環境を整えていくことに繋がる。

結論

創作物の悪役を手がかりとして悪について分析することで，堕落と更生という人生モデルを確認し，そこから堕落とその対処方法を見出した。

まず，私たちが堕落してしまう理由に，善の過酷さというものがあると考えられる。善く生きるためには，実践理性の要請に応え，道徳的な行為を至上のものとして優先し，利己的な願望は慎まねばならない。だが善行を貫くことには何ら保証はなく，全ての行為の結果は，良い結果も悪い結果もすべて自身の責任として降りかかる。このような過酷さから逃れたいと願った時，堕落への道筋が拓かれてしまう。

しかし，善からの逃避としての堕落は，選択意思が正常に機能している場合は，慎重に回避することが出来る。だが，そんな選択意思も，激しい絶望に打ちのめされたときには，正常な判断ができなくなってしまう。また，絶望的な経験は，日常的に善い行いを心がけている者に一種の懐疑心を呼び起こす。毎日善い行いをしていても，ある日突然絶望的な出来事が起こるとすれば，なぜ善い行いを続けなくてはならないのか。そのような疑問が脳裏を掠めると，正常な判断力は一層鈍ってしまう。

絶望に曇った状態では，悪への誘惑が大きな力を持つようになる。平時であれば聞き流すような誘惑の言葉であっても，深く沈んだ心には強く響いてしまう。

このように私たちは実践理性の要請に応え日々を過ごしているが，深い絶望と悪の誘惑に襲われた時には，堕落の道へと転じてしまうことがある。

堕落の果てに待つのはベイダーのような悪役の人生だ。ベイダーのよう

な悪役は，善を激しく憎み破壊の限りを尽くし快楽を貪る。だがそれは善になれなかったという哀しみの反動によるものだ。悪事の裏には，善から逃れた罪悪感が潜んであり，それがベイダーの帯びる哀愁，ペイソスを生み出している。

それでは私たちが堕落しないために必要なこととはなにか，また堕落をしてしまった後に更生するにはどうすればよいのか。

堕落の予防策として，柔軟な思考を心掛けることが重要と思われる。日常のすべての出来事に対して，一点の穢れのない清浄さを求めて生き続けることは苦しく，長続きしない。そうではなく，大事と小事とを区別し，適切な力加減で善を求めることができれば，善の過酷さもまた適度に弛緩する。

また，堕落の予防策にも更生にも重要な要素として，周囲の環境を整えるということが挙げられる。つまり，自分が絶望し，誘惑され堕落に陥りそうな時に，救いの手を差し伸べてくれるような環境に身を置くことが，堕落の対処方法として有効だと言える。

［参考文献］

カント著，波多野精一・宮本和吉・篠田英雄訳（1979 年）『実践理性批判』岩波書店。

※本稿は，令和 4(2022)年 9 月に行われた精神文化学会第 12 回学術大会（於:キャンパスプラザ京都）で発表した内容に加筆修正を施したものである。